

チリ・パタゴニア1968-69 —ある学生探検の記録

第13回

サン・ハビエル号 航海記 (その2)

安成哲三 やすなり てつぞう

名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学, 地球環境学)



イラスト=安成 晶

この連載は、現在の私ではなく、35年前に学生だった私の書いた記録である。当時、京都大学探検部に所属する学生であった私は、仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち、そして2年近くを費やして1968年によく実現した。帰国後、私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた。内容は、探検の思い立ちから帰国まで、私たちが何をやり、何を見聞きし、そして何を考えたかを、あくまで私自身を通して記したものであるが、いくつかの不運が重なり、結局、そのまま35年間、眠り続けることになってしまった。今回、1960年代末の学生による「探検」の記録として、ほとんどそのまま『科学』に、十数回に分割して掲載していた

だくことになった。

水河地域での調査の後、ウェリントン島の基地ブルート・エデンから大型モーターボートの「サン・ハビエル号」で、人跡未踏の複雑な諸島部の水道を通り抜けて太平洋岸までの数日の小航海を行ったが、前回(第12回, 3月号)は、その前半の報告を行った。古地磁気調査のための石のサンプリングをしながら、雨が降り続く細い水道を通り抜けて、風波の強い太平洋へ出る興奮の航海であった。今回は再び迷路のような水道を巡りつつ、あざらし捕りなどのハブニングを経験して、エデンに戻るまでの報告を行う。

船内で寝袋に入ってふと考えた。明日はまだ天気が悪そうだが、こんなところでも嵐に遭ったらどうなるだろうか。

チリ・パタゴニアは、マジェランの航海以来、領土拡張、周航船の略奪、水路の測量、探検、科学調査等の目的を持って幾多の航海者たちがやってきた。しかし、「嵐の国」と言われている地だけあって、どの航海者たちも激しい嵐に苦しみ、そのうちのある者は遭難し、多くは想像を絶する状態の中に死に、ほんの一部だけが奇跡的に生還している。その2つの例を、この地域の原住民と航海の歴史を調査した人類学者ジョセフ・エンペレル(Joseph Emperer)の報告『海の放浪民

(Los Nomades del Mar)』から紹介しよう。

サン・セバスチャン号の遭難

1557年、時のチリ総督はマジェラン海峡付近の探査と領有を目的として2隻の船を出帆させた。当時チリはまだスペインの統治下に置かれたばかりだった。1隻はファン・ラドリジェーロの率いるサン・ルイス号、もう1隻はフランシスコ・コルテス・デ・オヘアの率いるサン・セバスチャン号だった。2隻は共に南下しペニャス湾を通過してグワネコス諸島(メシエル水道の北の入口付近の諸島)に達した時、嵐に遭った。嵐の中



で2隻は離れてしまい、以後まったく別の行動をとることとなった。

サン・ルイス号は、ファヨス水道を南下し、ウェリントン島の南にあるマドレ・デ・ディオス諸島に達した。マジェラン海峡へ通じる水路を捜して進んだが、幾度も失敗し、ある時は水河のあるフィヨルドにつきあたり、ある時は袋小路の湾に入りこんだり、島々の間を行ったり来たりしていた。数カ月後、やっとマジェラン海峡に達することができた。しかし、そのために数々のフィヨルド、水道、湾の発見をなし(例えばメシエル水道、エイレ・フィヨルド、ウルティマ・エスペランザ湾など)、マジェラン海峡地方の水路誌に大きな功績を残した*。ラドリジェーロの日記はアラカル族や、諸島部の自然の正確な記述がしてある最初の資料としても評価されている。

一方、サン・セバスチャン号は、やはりマジェラン海峡への水路を捜してアノーベル島付近を航行するうちに嵐に遭った。嵐の中をカンパーナ島の自然の避難港に逃げこみ19日間停泊したが、嵐は荒れつづけ、錨が切れぬかとつねに警戒せねばならず、昼夜不眠不休が続いた。乗組員は1人また1人と倒れていった。20日目、やっと好天がやってきたので出帆したが、翌日ふたたび嵐がやってきて、1カ月間止むことなしに続いた。その間錨も失い、ウェリントン島の南西岸にあるピクトン水道の小入江に避難した。船体は修理不可能なほど大破してしまった。そこでコルテス・デ・オヘア船長は新しく船を作ることにした。サン・セバスチャン号の残った材料と切り出した木材でかれらは2本マストの帆船を6カ月かけて作りあげた。1558年8月、オヘア以下乗組員は冬の海に帆船で乗り出した。ファヨス水道を北上し、最大の難所ペニャス湾の入口まで来た。好天を待ち、危険を冒してやっと湾を渡り切ることができた。その後はチョノス諸島、チロエ島と進み、グアフォという港に着くことができた。途中、チロエ島付近のコロナドス湾では、船がくじらの背中に乗りあげ、くじらの力で進んだというそ

のような話までついている。

ウェジャー号の遭難

まず歴史的背景を少し述べておこう。1713年のユトレヒト条約の結果、イギリスはスペインから海洋および植民地における多くの利権を獲得した。イギリスはその利権を乱用してアメリカ大陸におけるスペインの貿易を弱め自国の貿易権を確立していった。スペインは勢力をもち返そうとして1739年から、ヨーロッパにおけるオーストリア継承戦争に呼応して、南アメリカの植民地でもイギリスと衝突することになった。

マジェラン海峡に向かったイギリスのアンソン提督に率いられた大艦隊は、通行するスペイン商船を容易に拿捕することができるはずだったが、ホーン岬付近で大嵐に遭い、艦隊はばらばらになってしまった。そのうちの1隻、チーフ艦長に率いられたウェジャー(Wager)号は、太平洋側の諸島部をさ迷い、グワネコス諸島の岩礁に船体を碎かれ、200人ほどの乗組員は近くの島に逃げた。1741年5月のことである。島につくと、大部分の乗組員はチーフ艦長に対して反乱を起こし、そのうちの80人ほどは甲板もない小さな3隻の船に分乗して南へ向かい、マジェラン海峡をへてブラジルまでたどりつこうという途方もない試みをやった。ボロ船で糧食も持たず、途中で遇ったインディオたちの犬を手に入れて飢えをしのぎ、想像を絶する苦難の旅をつづけ、8カ月後ついにブラジルにたどりついた。かれらの航海は世界航海史上最も冒険的で困難なもののひとつといえる。残ったもののうち、12人はシプレで船をつくり、北へペニャス湾を越えてチロエ島まで行こうとした。2度、3度と試み、途中あざらしの肉を食いながらこれまた苦難の旅をつづけ、13カ月後やっとチロエ島にたどりつき、スペインの捕虜として捕えられた。しかしその時はすでに4人しか残っていなかった。その中には、士官候補生としてウェジャー号に乗りこんだジョン・バイロン(詩人バイロンの祖父)もいた。彼は20年後、再び太平洋側諸島部へ探検隊を率いてやってきた。北へも南へも行かなかった人たちは漂着した島で

* この結果、マジェラン海峡はスペイン領だと宣言し、これに対抗して、英国の有名な海賊F.ドレイクが出てくるのである。



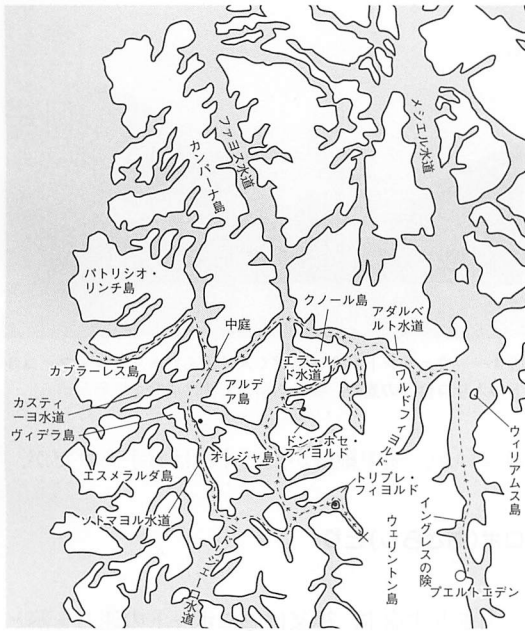


図1——サン・ハビエル号の航路。×印はあざらし(ロボ)とりの地点。●は宿営地点。

死に絶え、つい最近までかれらの骨が残っていたという。ウェジャー号の遭難したグワヤネコス諸島には今もウェジャー(ヴァーゲル)島、パイロン島という名が残っている。パイロンは帰国後、この事件の詳しい報告書を書き、それはアラカルフ族やチョノス諸島のインディオたちに関する貴重な資料となっている。

ウェリントン島の奥深く

2月13日。雨はまだ降っている。朝のうち海岸に上がりサンプリング。が雨のためクリノメーターの文字盤が濡れて見えず測定が荒っぽくなる。伊藤隆は彼の仕事のひとつである苔集めを熱心にやっている。午後、やっと天気は回復に向かったので出発。オレジャ島とエスメラルダ島の間を細く南へ走るソトマヨル水道を南下する。神父はつねに高度計を懐中に入れていて時々気圧を調べている。昨夜は1000ミリバール近くまで下がった気圧も徐々に上がり出した。1時過ぎ、広いラドリジェーロ水道に出る。16世紀の探検者ファン・ラドリジェーロにちなんだ水道だ。この水道は北のファヨス水道のつぎになっている。このあたりの山なみは平均600~700mでゆったりと



図2——細い水道の横にそびえる絶壁の岩山。このような氷蝕の地形は水道の周りには至るところに見られる。

つづいており明るい感じのする水道となっている。ボートは水道を北東方向に斜めに横断し、対岸のアンガモス島に入りこんだ細い水道を進む。無人の地帯を進むことすでに4日、ぼくたちはウェリントン諸島(ウェリントン島を中心に付随した島々を含めて四国よりやや広い面積を持つこの一帯を仮にそう呼ぶ)の奥深くわけ入っている。16~18世紀にかけての植民地開拓時代には、南米最南部の領土権を主張して、あるいはマジラン海峡への水路を求めて多くの航海者たちが複雑に入り組む水道を探検したが、以後はまったく忘れ去られた地帯だ。19世紀末にチリ政府が、水路の確保の必要性から測量船を出したことはあったが、学術探検隊はほとんど来ていない。今世紀に入って、とくにメシエル水道以西の太平洋岸に至る諸島部の探検にやってきたのはぼくたちがはじめてだと、神父は言う。幅数百mでまっすぐ伸びる水道の正面に数百mの絶壁が現われ、行きづまりのように見える。地図で見ると、南東方向に走る水道が急に折れまがって北へ向いている。奥まった絶壁の上は雲がかかり、よく水木しげるの怪奇漫画などに出てくる深い山奥の魔王の住む山のイメージだ(図2)。地図によると、絶壁の奥にはジークフリート山という1100mほどの山がある。名前もピッタリだ。北にまがってしばらく走ると、パッとふたたび中庭のようなところが出る。ファヨス水道が太平洋へ出るラドリジェーロ水道とウェリントン島の奥深く入るマチャド水道に分かれるところだ。ウェリントン諸島の文字どおりどまん中だ。360度、近く遠く山々に囲まれ、その谷間に、水路が四方に入った光景はどまん中





図3——「中庭」の周りの景観。迷路のような水道の周りには幾重にも山が連なっている。

の中庭にふさわしい(図3)。

「中庭」からウェリントン島の中へ東北東の方向に入りこんだトリプレ・フィヨルドに入る。ボートは時速10km前後で進む。どんづまりの少し手前から南南東の方向にさらに深く細く続く支フィヨルドに入る。このフィヨルドはウェリントン島の奥深く入りこみ、両岸は急な山腹がせまる(図4)。とくに右岸は50~60度の傾斜の大岩壁が600mは切れ落ち、海拔700~800mの稜線は白く残雪におおわれている。稜線からその岩壁を水面まで幾本も白く走る滝は壮絶という以外にない。氷河に覆われ、削りとられ、露岩地帯になってまだ間もない(もちろん地質学的タイムスケールでいって)このあたり一帯には、川の浸蝕によってできた「谷」というものはない。あるのはただ、氷河で削りとられた跡のフィヨルド、水道、湖だけだ。したがって山に積もった雪や降った雨は、露岩の斜面のちょっとしたくぼ地や割れ目をつたって滑滝となって海や湖に落ちる。土がないので地下水となってしみこむということもない。稜線上から数百mも延々と落ちる。融雪量や降雨量によってその数が増えたり減ったりする滑滝はチリ・パタゴニア特有の自然のひとつとも言える。

どんづまりは平坦な地形でコイウエの原始林がびっしりおおっている。両側の急しゅんな岩肌をぬって平坦地はさらに奥へと続き、湖のあることを予想させた。ここから島の東岸にあるエデンまでは15kmしか離れていない。ここでおりてエデンまで島を横断する試みは、下の原始林帯は非常に苦労するだろうが、稜線に出れば楽しいので



図4——ウェリントン島に奥深く入り込んだトリプレ・フィヨルドの入り口付近の景観。狭い水路の両側に急峻な地形が迫る。

はないか。途中絶壁が出てくればお手あげだが。

ロボ(あざらし)とり

引き返す途中、神父は急にボートの速力を落とし、レヴィカンが猟銃を持ってボートのへ先に立った。何ごとかと思ったら、ロボ(あざらし)の巣を発見したのだ。巣は岸のこんもりと繁って枝が水面すれすれにおおいかぶさった大木の下にあるらしく、ボートからは直接見えない。エンジンを止めて静かに近づいていくと、確かに鳴き声がかきこえる。ズドンズドンと2発ぶつ放す。突然2頭の大きなロボがバシャンバシャンと海へもぐり、鳴きながら逃げていく。繁みの中はクオッククオックと大騒ぎとなる。水面低く垂れ下がった枝をかき分けてボートのへ先を岸に突っ込む。繁みの下は数m四方位の石畳になっており、木の陰で薄暗い。プンプンとあざらしの体臭と糞のにおい。動物園の檻の近くに行った時のにおいと思えばいい。よく見ると子ロボが数頭石畳の上を動いている。レヴィカンはコン棒を手にして岸にとびおる。逃げまどう子ロボは石畳の奥にある岩のくぼみへわれ先に急ぐ。逃げ遅れた子ロボの頭上にレヴィカンのコン棒が容赦なく落ちる。ギャツという鳴き声。コツンコツンと頭がい骨を打つ音。1頭また1頭とコン棒で連打され倒れていく。中には歯をむき出して抵抗するものもあるが、1mそこそこの子供だ。頭を1,2回強打されるとひるんでしまう。石畳はみるみるうちに赤くなり、血は海に流れ出て、ボートのまわりの水面は鮮血に染められる。神父はボートのへ先へ行ってレヴィ





図5——殺されモーターボートに積まれた9頭の子あざらし。

カンの格闘ぶりをさも楽しそうに、かつ必死になって見まもっている。伊藤は船内に入ってしまった出てこようもしない。まったく、稲作農耕民族として、つい最近まで魚しか動物たんぱくを摂らなかった日本人にはまともには見られない光景だ。エデンでのクリスマスに、殺した羊の血を皿に受け、その生暖かい生き血を口のまわりをまっ赤にしながらいまそうにペロペロなめるベルタおばさんを見て、多くの日本人隊員はやはり何かたえられぬものを感じたという。ぼくは神父の横で見ていたが、わずかに、恐いもの見たさの好奇心に支えられていたようなものだ。

レヴィカンは3,4頭をたたき殺した後、岩のくぼみに逃げたのを追いつめて、しきりにけん制している。と別のくぼみから1頭がするっと出てきて、レヴィカンのうしろにまわる。

「レヴィカン！ うしろ！」と神父が叫ぶ。はっと気がついたレヴィカンはまたたくうちにたたきのめしてしまう。追いつめられたロボは次々に出てきてやられてしまう。不思議なことに海へ逃げたのは、最初の2頭以外にはいない。あの2頭は親だったらしい。レヴィカンも苦しそうだ。時には1度に2,3頭も出てきて、メチャクチャに棒をふってやっと殺していた。子ロボとて油断はできない。最後の1頭がしばらくクオッククオッと悲しそうに鳴いていたが、観念したのか姿を現わして少々抵抗した後、レヴィカンの一撃に倒れた。

さっそくレヴィカンはロボの尾を持ってボートのへ先にほうり上げる。1頭上げるごとにボートに手をかけてハァーハァーと激しい息づかいをす



図6——コイウエ(南極ブナ)に覆われた小島のあるトリプレ・フィヨルドの奥。

る。しかし、うれしそうだ。獲物は全部で子ロボ9頭だ(図5)。約40分の活劇が終わり、ボートはふたたび出発する。

トリプレ・フィヨルドに出るとさらにフィヨルドの奥へ進む。どんづまりは小さな島のある入江になっている(図6)。入江の奥の浜辺にボートをつけ、今日はそこで停泊する。レヴィカンはさっそく1頭の皮をはぐ作業にかかった。ナイフで腹をたてに割り、そこからみごとに両側に皮をはいでいく。皮のすぐ中には白くて柔らかそうな脂肪がある。皮は乾して売り、肉も乾して保存肉として食べる。とくに子ロボ(エデンの猟師たちはポポといっている)の肉は味が良いという。皮はプンタ・アレナスあたりに出すと1枚30エスクード(約1000円)位になる。

潮のみちひ

2月14日。午前中石のとれそうなところをボートで回って捜すが海岸付近はびっしりと木が生え、露岩がでていない。昨日ロボとりをした支フィヨルドに入るとベタツとした大岩壁ばかりでこれまた取れそうもない。やっと小さな入江の波打ち際に適当な岩を見つけ、おろしてもらおう。神父は昼に迎えに来るといって昨日の停泊地に戻る。花崗岩だが相当硬い。伊藤は苔とりと植物採集、森の中に人間の足跡のようなものを見つけたと騒いでいる。ハンマーをふるってサンプリングをしていると、潮がだんだん満ちてきて、岩が少しずつ水にかくれていく。やっと5,6個とった頃にはすでに大部分水没してしまった。それよりもほ





図7—静かなドン・ホセ・フィヨルド。周りはコイウエがびっしりと生えている。

くたちの居場所がなくなってきた。満潮になると海水はちょっとした砂礫の浜をなくし、森林のやぶまで入ってくる。ほんの少し水面に出た岩にやっと2人乗ってボートを待つ。

がなかなか来ない。腹はへってくる。この入江はあいにくと貝もあまりいない。ここにとり残されたらどうしようなどと言いあって暇をつぶす。午後2時、やっと迎えに来た。レヴィカンはすでにロボの解体作業を終わり、皮と肉に分けてへ先に積んでいた。

トリプレ・フィヨルドを出てファヨス水道を北上する。午後5時、ウェリントン島の北西角にあるドン・ホセ・フィヨルドに入り、入口は狭く中が広くなった静かな入江に入る(図7)。停泊することにした浜辺はチョルガが非常に多い(図8)。夕方は引き潮でまるで海岸にころがる石ころのように一面にでてくる。林を切り開いてたき火する場所をつくる。砂浜は満潮になればなくなってしまふ。砂浜というより小石の浜と呼ぶのがふさわしい。一般にフィヨルド地帯の海岸は細かい砂は余り見かけない。ひとつには、川による浸蝕、堆積がないこと、もうひとつは波があまりないことによるのだろう。レヴィカンはテプーの木でうまく鍋をかける工夫をする。テプーはたき火には一番いい木で、細い枯れたものはたきつけにも使える。



図8—浅い水辺に生息するたくさんのチョルガ(ムール貝の一種)。

夜はたき火を囲み、木々の梢の間からのぞく星を見ながら、マテ茶とチリ・ブランデー、焼チョルガのおつまみで神父やレヴィカンと談笑する。プエルト・エデンの話、アラカルーフの話。チロエなまりのレヴィカンのことばはわかりにくい。パタゴニアの夜は静かにふけてゆく。

翌朝、神父にたたき起こされる。ボートが座礁している。あわてて飛びおり船体を軽くしてゆっくりと離礁させる。この付近の干潮の差は約3mだ。朝食後、森をわけ入って露岩のあるところまで行ってみる。変成岩だ。変成岩では、残留地磁気は変成作用の過程で変化しているため、古地磁気調査にはむかない。残留磁気は変化しているのでサンプリングせずに引き返す。

ボートはクノール島とウェリントン島間のエラールド水道を走る。途中アラカルーフのチョルゲロがひとつ。静かな水面にボートが残す波紋がきれいだ。伊藤は採集した植物のスケッチに余念がない。メシエル水道に出て岸に沿って走ると、潮汐が白い細かい泡のラインを水面上に作って動いている。この水道の潮汐は北から南へ、イングレスの険を越えてサウマレツ島付近まで入ってくるという。

午後5時過ぎ、5日ぶりにエデンの入江が見えた。「サン・ハビエル」号による約500kmのボート探検行も終わりに近い。

